

グループ・ディスカッションの初期熟達化を促進する グラウンド・ルールの策定

Developing Ground Rules for Group Discussions at an Early Stage of Higher Education

中野 美香

Mika NAKANO

福岡工業大学

Fukuoka Institute of Technology

<あらまし> 近年、教育現場において対面、遠隔を問わずディスカッションの導入が増えて
いる。しかし、様々な理由や特定の状況で「やりづらさ」を感じる学習者も少なくない。そこ
で大学生の汎用的なグループ・ディスカッション能力を育成するために、グラウンド・ルール
に着目し、初期熟達化を促進するグラウンド・ルールの策定について経験者を対象にインタビ
ュー調査を実施した。この結果を基に、大学の半期 15 回講義で使用するグラウンド・ルールを
提案することを目的とする。

<キーワード> コミュニケーション、遠隔教育・学習、学習環境、教育方法、授業実践

1. はじめに

高等教育においてコロナ禍以降、遠隔・対
面の両方に対応できる汎用的なグループ・デ
ィスカッション (GD) が求められている。学
習者同士がコミュニケーションする遠隔授業
や就職活動の遠隔での面接等、対面か遠隔か
は状況によって臨機応変に対応しなければなら
ない場面も増えた。一方で、GD は複数の
発話者によるインタラクションであるため、
難しさややりづらさを感じる学習者も少なく
ない。遠隔コミュニケーションに対する大学
生の認識を調査した研究(中野, 2021)では、
視覚や身体を通して得られる情報が限られる
ため行動規範がわかりづらいことが「やりづ
らい」という感覚の原因になっていた。ここ
で言う「やりづらさ」とは、「その状況を何と
なく避けたい感じ」のことを指す。

筆者は、繰り返しの経験と「やりづらさ」
の関係に関する研究(中野, 2022)より、「や
りづらさ」の解消にグラウンド・ルール(GR)
が有効であることに着目した。GR は会議や
話し合いをおこなう際に設定するルールや方
針のことで、「相互の主張や発話内容、発話の
意図を正確に理解するために厳密な言語学的
知識に加えて、会話の参加者が保持している
事が必要となる、ひと揃いの暗黙の理解」
(Edwards & Mercer, 1987 ; 松尾・丸野,

2008) を指す。遠隔か対面かに関わらず、ル
ールを決めることで「やりづらさ」につな
がる問題の対策となる。しかし、初心者には注
意を向ける必要がある事項が多数あることか
ら、反復的な GD を経験した学習者の声を取
り入れることが適切な GR の作成に不可欠で
あると考えた。そこで本論は GD における GR
に着目し、経験者を対象にしたインタビュー
の結果を基に大学生の初期熟達化過程に適
した GR を提案することを目的とする。

2. 方法

大学生の GD の初期熟達化における効果的
な GR を検討するために、15 回講義中 13 回
の講義で GD を実施した 2022 年度の教養科
目の受講者を対象とした。この講義では 60 分
間の心理学の講義を聞いた後、毎回 30 分程
度、4 名程度のグループでディスカッション
の時間を設けた。第 3 回以降の講義では毎回、
席替えをおこなって、大半が初対面の学生と
ディスカッションする経験を積んだ。講義で
は 10 分程度、GD の技法(中野, 2018) に関
する講義も含めた。

上記の講義の受講者を対象にインタビュー
調査の協力者を募集し、3 名の協力を得た。3
名は大学 2~4 年生で、講義では熱心に GD
に参加し、他の学生の模範となった学生であ

る。受講時はそれぞれ1~3年生であった。協力者には調査の趣旨や方法を説明し、書面で同意を得た。調査は2段階で実施した。はじめに2023年3月にアンケートに回答してもらった。アンケートはGRを講義で使用した感想や効果的な導入方法に関する8つの質問で構成される。アンケート調査はメールでWordの質問票を送信し、1週間後までに返信してもらった。次に、2023年4~5月にアンケートの回答を基に1対1で約60分間の半構造化インタビューを対面で実施した。インタビューではアンケートの回答について詳しく質問するとともに、外の協力者の回答を匿名で許可を得て提示し、自身との共通点と相違点について質問した。インタビューはICレコーダーで録音し、書き起こされた。

本論で分析した質問項目は、問1「7. GDの能力を向上するために、GRはグループの学生同士で決める方がよいと思いますか」、問2「GDの能力を向上するために、どのようなGRが適切だと思いますか」である。問2は経験の少ない学習者(0~3回程度)、数回経験のある学習者(5回程度)、ある程度、経験のある学習者(10回程度)に分けて回答してもらった。

3. 結果と考察

問1「GDの能力を向上するために、GRはグループの学生同士で決める方がよいと思いますか」の回答結果は、すべての協力者が「学生同士で決めた方がよい」という回答であった。主な理由として、「自分たちで決めた方がルールを守ろうとする」「ルールを考えることで前回のGDを振り返るため上達する」「グループとしてまとまる」などが挙げられた。

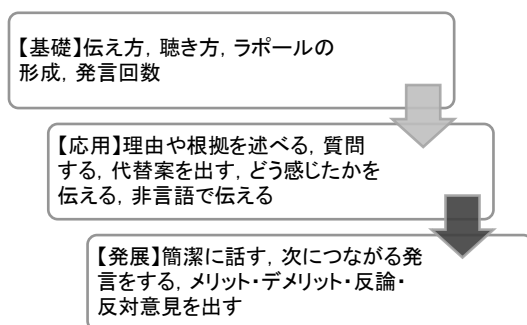


図1 インタビュー結果：3段階のGR構成

GRについて理解できない学生もいることから、最初の3回程度は教員が提示し、慣れてきたら学生同士で考えさせるという意見もあった。

次に問2「GDの能力を向上するために、どのようなGRが適切だと思いますか」の3名の結果結果を図1にまとめた。経験の少ない学習者には、伝え方、聴き方等のGDを成り立たせるために必要不可欠な項目が挙げられている。この段階では内容には深く入らずに、安心して意見交換ができるグループの関係作りが重要となる。次に数回経験のある学習者には、主張の説得力を高めたり、グループ間のやり取りの幅を広げる項目が挙げられた。経験を積んだ学習者には、時間内に効率よく伝える方法や相互作用を活発にするようなGRの提案があった。これらは回答者自身がGDを繰り返し経験し、他者の学習を観察してきたからこそ得られる重要な知見である。図1の提示は学習者同士でGRを作成する際に役立つと考えられる。

4. まとめと今後の展望

本論では、大学生のGD支援を目的としてGRを作成するために経験者にインタビューを実施した結果をまとめた。発表ではこの結果を基にGRのリストを提案する。

参考文献

- Edwards, D., & Mercer, N.(1987). Common knowledge: The development of understanding, in the classroom. London: Methuen/Routledge.
- 松尾剛, & 丸野俊一. (2008). 主体的に考え、学び合う授業実践の体験を通して、子どもはグラウンド・ルールの意味についてどのような認識の変化を示すか. *教育心理学研究*, 56(1), 104-115.
- 中野美香 (2018) 大学生からのグループ・ディスカッション入門. ナカニシヤ出版
- 中野美香 (2021) Teamsを用いたグループワークの教育的価値：コミュニケーションの心理学における導入事例. *福岡工業大学FD Annual Report*, 10, pp.22-27.
- 中野美香 (2022) 遠隔ディスカッションにおける「やりづらさ」と経験の関係. *日本教育工学会2022年秋季全国大会講演論文集*, pp.373-374.